

環びわ湖

大学地域交流フェスタ 2020



環びわ湖大学・地域コンソーシアム

活動報告会プログラム

12月6日(日)

10:00～12:10<予定>

会場:オンライン(ZOOM)で実施

主 催：一般社団法人環びわ湖大学・地域コンソーシアム

〒520-0056 大津市末広町 1-1 日本生命大津ビル 4 階

TEL：077-526-8850 FAX：077-526-8851

e-mail：info@kanbiwa.jp <https://www.kanbiwa.jp/>

ごあいさつ

みなさま、新型コロナウイルス感染症の感染拡大のなか、お元気でお過ごしでしょうか。大学も地域も、この10か月以上もの間、様々な困難に対応してきました。このコロナとの闘いも、治療薬やワクチンの開発も進んでおり、出口が見えてきました。収束までは、気を緩めることなく。3密を避けるなど、感染拡大の防止と新しい生活の工夫をこらしていきましょう。

大学地域交流フェスタは、環びわ湖大学・地域コンソーシアムが、大学と地域との交流を深めることを目的として、コンソーシアムの「大学地域連携課題解決支援事業」と「学生支援事業」の活動報告を行うとともに、地域の皆様と大学生との交流を図り、大学と地域が手を携えて互いの発展に力を注ぐ一つの大きな糧とするものです。今年度、コンソーシアムは「持続可能な開発目標に向けて」と題する第3ステージ宣言を行い、SDGsの達成を大きな共通目標として、これまで以上に多様で新しい連携・協働を進め、実り多い成果を積み重ね、滋賀の地域の発展に貢献していくことを表明しました。

しかし、残念ながら今年度は新型コロナウイルス感染症のために、当初予定していた15件の地域課題解決支援事業にも大きな影響が出ています。今年度のフェスタも、多くの方々に集まって意見交換や交流をしていただくような大人数の集会は避けなければなりません。そこで、例年のような交流会を中止し、オンラインで各活動の中間報告を行うことといたしました。工夫を凝らして活動ができたところはその内容と今後の予定を、また活動ができなかった場合には今後の予定や実施に向けての検討結果や計画を紹介していただきます。この試みによって、互いの工夫や計画を参考に、それぞれの活動を一步でも前に進めることができれば、と願っています。

新型コロナとの闘いは、SDGs達成への私たちの活動への試金石でもあるでしょう。今年度のフェスタが、現下の困難を乗り越えて、「だれ一人取り残さない」豊かで幸せな世界の実現に進む、意義深い催しとなることを祈ります。

2020（令和2）年12月6日

一般社団法人環びわ湖大学・地域コンソーシアム
理事長 位 田 隆 一（滋賀大学学長）

■プログラム（概要）

1. 開会（10:00）

2. 環びわ湖大学・地域コンソーシアム 大学地域連携事業活動
中間報告会（10:00～12:00）

3. 閉会（12:10<予定>）

環びわ湖大学・地域コンソーシアム
大学地域連携事業活動報告

1. 大津市×龍谷大学	4
「大津人（おおつびと）実践講座～私が地域のためにできることを考える～」大学・地域 連携によるまちづくりの担い手づくり「大人のアクティブ・ラーニング」プログラムの開発	
2. 東近江市×びわこ学院大学	6
親子ふれあい遊び事業	
3. 草津市×立命館大学	8
「草津の魅力」を再発見！～草津市内に点在する歴史資産を繋ぐ保存・活用手法の提案～	
4. 東近江市×聖泉大学	10
八日市「商店街にぎわい創出」プロジェクト	
5. 滋賀県×びわこ学院大学	12
地域の公共交通を維持確保していくためのモビリティ・マネジメントの研究	
6. 長浜市×長浜バイオ大学	14
保育園児の農場体験を通して農業従事者の減少課題を考えるイベントの実施	
7. 草津市×龍谷大学	16
訪日外国人旅行者（インバウンド）に向けた草津の魅力発信～ふらっと寄りたい草津旅～	
8. 滋賀県×びわこ学院大学	18
大学生による子どもたちへの性犯罪予防の SNS の使い方啓発活動 ～S（スマート）にN（ネット）を使えばS（スマイル）に～	
9. 大津市×びわこ学院大学	20
就学前児童から科学の面白さを体感させる実験・ものづくりプロジェクト	
10. 大津市×滋賀県立大学	22
「お弁当ラリー」を通じた「大津ナカマチ SDGs 商店街」プロジェクト	
11. 東近江市×龍谷大学	24
「市」を通じた地域の活性化ー中山間の「位置」エネルギーを創出ー	
12. 甲賀市×立命館大学	26
甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）の魅力を創造する旅、 甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）から発信する「すべての人に健康と福祉を（SDGs）」	
13. 甲賀市×立命館大学	28
国史跡紫香楽宮跡を活かした地域振興について	
14. 甲賀市×立命館大学	30
神仏習合の里、甲賀杣谷のストーリーブックをつくる	
15. 草津市×立命館大学	32
芦浦観音寺納豆再現プロジェクト	
16. 学生支援事業部会報告「SHIGA SDGs Studios」	34

No. 1

プロジェクト名（活動テーマ）：「実践講座～」私が“地域のためにできることを考える～」大学・地域連携によるまちづくりの担い手づくり「大人のアクティブ・ラーニング」プログラムの開発	発表者
提案者：龍谷大学政策学部 只友景士ゼミナール 教授 只友景士	
自治体担当者：大津市教育委員会事務局生涯学習課 課長補佐 金森 聖之	
連携大学担当者：龍谷大学政策学部 只友景士	○

1. 取組体制

- ◆龍谷大学・・・実践講座【まち歩き編】での講師（理論学習・グループワークの指導）
実践講座へのゼミ生の参画（グループワークでのファシリテーター等）
- ◆大津市・・・実践講座の運営、地域との調整等
- ◆地域・・・実践講座への参加協力（地域の資源、課題等のアドバイス等）
- ◆その他・・・講座の運営補助（講座修了生で組織する「おおつびと倶楽部」）

2. 背景・目的

大津について学ぶ連続講座を通して、①郷土愛の涵養、②学ぶ者同士の仲間づくり、③地域課題の発見とその解決手法の学修、④地域づくりのために行動できる「大津人」の育成を目的として、大津人実践講座を実践する。（連続5回講座）

令和元年度の活動により、受講者と地元団体の具体的な企画案の成案を得るとともに、その中からまちづくりグループも生まれた。令和2年度も同様の効果を得るとともに、これまでの実践講座フィールド地区間の連携も進められると考えている。

3. 活動内容

前半は具体的な街づくりの取り組み事例を地域や企業等の活動実践者から、熱い想いや課題も含め同時に学ぶ。

後半は特定の地域をフィールドに、まち歩きやグループワークを通して、課題発見とその解決手法を学び、まちづくり仕掛け人の養成を図る。最終講では、地域づくりのための企画書（案）を受講者グループごとに発表する。

今年は大津人実践講座、おおつ学を学び「私が地域のために何かできることはないか？」を実施していますおおつ学とは、地域の歴史・文化・環境・産業など、大津に関する学習を通して大津を知り、愛する心をはぐくむとともに、学びあう仲間づくりや地域づくりのために行動するきっかけづくりを目的としています。

○体験学習の内容として

- ・歴史探訪〔歴史博物館学芸員と歩く大津の歴史旅〕
- ・イーチャン劇場〔地域住民によるオリジナル寸劇体験〕
- ・大津再発見〔明智光秀所ゆかりの西教寺に学ぶ〕
- ・まち歩きでは真野学区をフィールドとした街の資源や課題を発見していきます。

○第一回大津人講座歴史探訪コース（11月14日（土）実施）

JR おごと温泉駅→千野→安養院→和田秀純の墓→雄琴城跡→福領寺→雄琴会館→JR おごと温泉駅



写真 1 良源の母が住んでいたとされる安養院



写真 2 雄琴会館

4. 成果と課題、今後の取組

- ・受講生、大学生、地域が同じ場で議論し、市民協働の実践的な学びの場を作ること、議論の活性化を図るとともに、立場の違うもの同士の相互学習を進める。地域づくりのコミュニケーション能力の養成を図る。
- ・特定の地域をフィールドとすることで、より具体性のある企画案となり、受講生の主体性が育まれるとともに、次の行動への原動力となる。
- ・大学生にとっては、多くの大人とのかかわりの中で、グループワーク等におけるファシリテーター役として参画することで、自己肯定感や自己有用感を涵養するとともに、まちづくりの現場に関わることで、実践的な学びとなる。
- ・地域にとっては、大学と連携し、生涯学習課らのまちづくりを経験することにより、まちづくり協議会など今後における学びを実践した地域づくりの参考となる。
- ・市内各学区に広げていくことで、全市的なシビックプライドの醸成につながる。
- ・講座終了生による組織「おおつびと倶楽部」が設立され、講座との連携がなされることで、講座終了後も継続した活動が期待できる。

■実施スケジュール〔当初予定〕

- ・4月～6月 講師、地域等調整、受講生募集
- ・6月～2月 実践講座（閉講式、体験学習、理論学習、GW、発表会、修了式）

■2020年実際のスケジュール

回	開催日	内 容	講師名	開催場所
1	11月14日(土) 12:30～16:00	「歴博学芸員と歩く歴史絵巻 ～雄琴城とその周辺を訪ねて～」 ・オリエンテーション ・現地での歴史散歩	トータルコーディネーター 成田賀寿代氏 大津市歴史博物館学芸員 和田 光生氏	J R湖西線 「おごと温泉駅」 周辺
2	12月5日(土) 13:00～16:30	「オリジナル脚本でたどる 地域の伝説～衣装つけて ロパク役者体験～」 ・講話、観劇、体験	南滋賀村の歴史を学ぶ会 会長 大伴 偉造氏	南滋賀公会所
3	1月23日(土) 13:30～15:30	「麒麟とは光秀公か？ ～西教寺編～」 ・講話、寺院案内	宗教法人 西教寺 執務主事 前阪 良樹氏	天台真盛宗総 本山 西教寺
4	2月6日(土) 10:00～16:00	「真野のまち歩き① ～まち歩きを仕掛ける～」	龍谷大学政策学部 教授 只友 景士氏	真野公民館 他
5	2月23日(火・祝) 10:00～16:00	「真野のまち歩き② ～“私たちが”地域の 為にできること～」		

No. 2

プロジェクト名（活動テーマ）： 親子ふれあい遊び事業（親子スキンシップ遊び）	発表者
提案者：びわこ学院大学 教育福祉学部 奥田ゼミ	○
自治体担当者：東近江市こども未来部子育て支援センター 三原牧子	
連携大学担当者：びわこ学院大学 外部連携研究支援課 澤井二三夫	

1. 取組体制

本事業は、びわこ学院大学奥田ゼミおよび東近江市子育て支援センターの連携により、以下の取り組み体制で実施している。

＜びわこ学院大学奥田ゼミ＞

- 育児ストレス低減を目指した「親子スキンシップ遊びプログラム」の作成と実施
- 「親子スキンシップ遊びプログラム」参加者（承諾者のみ）を対象とした、育児ストレスチェックシートの実施・分析および事後の聴き取り調査

＜東近江市八日市子育て支援センター＞

- 「親子スキンシップ遊びプログラム」の作成および実施に関する助言指導
- 「親子スキンシップ遊びプログラム」複数回参加者（承諾者のみ）を対象とした聴き取り調査における助言指導

2. 背景・目的

近年、未就園児の保護者（主に母親）の育児ストレスが問題となっているが、東近江市においても同様に課題となっている。そこで、提案者らは、昨年度より乳幼児と保護者の双方向のストレス低減のための「親子スキンシップ遊び」を展開したところ、昨年度は保護者の育児ストレスの低減が確認された。

今年度は昨年度実施の「親子スキンシップ遊び」の問題点を再考し実践することを通して、育児ストレス低減の具体について検証する。

本事業での成果は、乳児期の親子のスキンシップが親・子双方にとって重要であることのエビデンスとなり、愛着形成や望ましい発育発達の一助となるものとする。

3. 活動内容

東近江市八日市子育て支援センターでの乳児とその親を対象とした集いの場所である「赤ちゃん広場」において、「親子スキンシップ遊びプログラム」を実施し、その効果検証を行った。

●「親子スキンシップ遊びプログラム」の作成（2020年4月-6月）

昨年度の活動での課題をもとに内容を再考し、新たに「親子スキンシップ遊びプログラム」の

素案を作成し、子育て支援センター担当スタッフと協議し、最終的に 30 分程度の「親子スキンシップ遊びプログラム」を作成した。

●「親子スキンシップ遊びプログラム」の実施（2020 年 7 月-11 月）

毎月第一火曜午前に開催される、「赤ちゃん広場」に参加する親子を対象に実施した。

●育児ストレスアンケートの実施（2020 年 7 月-11 月）

「親子スキンシップ遊びプログラム」の実施後、対象者（母親）には「母親の心の健康チェックシート(MPHC)」(清水 2017*)を実施した。

*清水嘉子(2017)母親の心の健康チェックシートハンドブック。

●参加者への聴き取り調査の実施（2020 年 11 月）

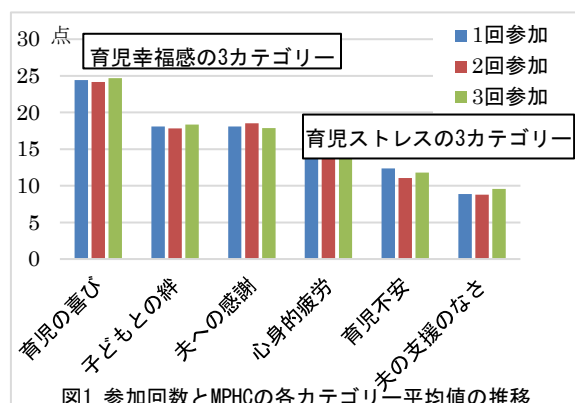
複数回の参加者を対象に聴き取り調査を実施した。



4. 成果と課題、今後の取組

図 1 に「親子スキンシップ遊び」への参加回数と育児ストレスチェックシートの平均値の推移結果を示す。今年度は 4 回参加者がなく、3 回参加者までの分析となった。

下位項目ごとに標準パーセンタイル表に照らし合わせた結果、参加回数に関わりなく“育児の喜び”と“夫への感謝”、“子どもとの絆”の育児幸福感尺度項目で高いパーセンタイルとなった。また、育児ストレス尺度項目のうち、“心身の疲労”については参加回数を追って低下が見られ、“夫の支援のなさ”においては 3 回参加者がやや高いパーセンタイルとなった。同様に“育児不安”についても 3 回参加者がやや高い傾向が見られた。このことから、「親子スキンシップ遊びプログラム」への複数回の参加者は、育児不安の低減を図っていることや、参加を契機に親子での関わりの変化が生じていることが窺われた。



次に、3 回参加者を対象に聴き取り調査を行ったところ、多くが 5～6 時間と子どもと 2 人だけで過ごす時間が長いことが語られ、ともすれば育児不安に陥りがちであると思われた。しかしながら、同時に子どもとともに出かける場所や、子どもとともに楽しむ内容の語りからは、ともにいることで、育児の喜びや子どもとの絆が高まっていることが考えられた。さらに、「親子スキンシップ遊びプログラム」参加後は、「子どもとの遊びに変化が生まれた」や「子どもとの関わりが楽しみになった」「スキンシップの大切さを感じられるようになった」など、子どもとの関わり方のポジティブな変化についての語りが多く、「親子スキンシップ遊び」参加を契機とした育児ストレス低減の効果の実感を確認することができた。

No.3

プロジェクト名（活動テーマ）： 「草津の魅力」を再発見！ ～草津市内に点在する歴史資産を繋ぐ保存・活用手法の提案～		発表者
提案者	：草津市教育委員会歴史文化財課 課長 岩間一水	
自治体担当者	：草津市教育委員会歴史文化財課 主任 馬場 将史	
連携大学担当者	：立命館大学理工学部 建築都市デザイン学科 及川清昭特命教授、青柳憲昌准教授、藤井健史助教	○

1. 取組体制

以下の体制で取り組んでいる。

- ・草津市教育委員会歴史文化財課 岩間一課長、馬場 将史
- ・立命館大学理工学部建築都市デザイン学科 及川清昭特命教授
- ・立命館大学理工学部建築都市デザイン学科 青柳憲昌准教授および建築史研究室
- ・立命館大学理工学部建築都市デザイン学科 藤井健史助教および建築設計研究室

2. 背景・目的

本市には寺社や歴史的な町並みなどの歴史資産が残されており、それらをまちづくりや観光へ活用する方法の検討が不十分である。そこで、立命館大学や地域住民とともに、歴史資産を対象とした調査を実施し、「草津の魅力」を再発見し、協働しながら議論・提案を行い、本市の歴史資産の総合的な保存・活用方法を検討する。

3. 活動内容

1) 草津市常盤地区の歴史資産を巡る観光ツアーの実施

2019 年度に実施したワークショップ「バス+徒歩で巡る、草津 いいもの探しツアーを考えよう」では、歴史資産、絶景スポット、食べ物スポットを地図上に並べながら、常盤地区を中心に草津の魅力を再発見し、ストーリーを込めながらこれらを繋ぐルートマップを作成してもらった。その成果を踏まえ、主催をしていただく市民団体「草津おみやげラボ」とツアー内容を企画し、実際のバスツアーを実施する予定であったが、新型コロナウイルスの影響により実施できていない。

2) 街道歴史散策 AR アプリの作成

東海道および中山道はそれ自体が旧街道という歴史資産であり、沿道にも多くの歴史資産が残されている。草津にとって観光やまちづくりの要所であるが、点在する歴史資産への誘導案内は



実施予定であった
ツアーのチラシ

十分に整備されているとは言い難い。例えば、草津宿本陣ですら草津駅からの誘導は十分ではなく、来街者にはわかりづらい。現状では旧街道を歩いているという実感を伴いづらく、歩いて楽しい歩行空間にはなっていない。草津市の歴史文化を活用した観光やまちづくりを推進する上での課題であると言える。

そこで、草津駅から中山道に入り南に直行し、東海道への京都からの入り口とされていた黒門址がある交差点を対象として、AR を活用して歴史を学びながら楽しく散策するためのアプリケーション開発を行っている。スマートフォン、タブレットを用いて、東海道・中山道を歩きながら道中に点在する観光資源に直に触れながら、そこからさまざまな歴史学習情報を取得し散策を進めていくことができる。言わば、原寸大の旧街道博物館のような、東海道・中山道を歩いて感じ、学べる AR アプリケーションの作成を目指している。現在、行政と連携しつつ AR アプリケーションの試作品の作成を進めている。



試作 AR アプリの作成例

4. 成果と課題、今後の取組

草津市常盤地区の歴史資産を巡る観光ツアーの実施は、実施が許される状況になれば実施予定であるが、残念ながら今のところ見通しは立っていない。

AR アプリケーションの開発はコンテンツ企画・作成を進めている。今後、市との協働で継続的に運用・活用していけるようなアプリケーションにしていく予定である。また、草津駅のペDESTリアンデッキや街道交流館前の広場など、まち歩きの出点やポイントになるような箇所には実際の路面標示のデザインと設置を行うことも検討している。従来の経路案内に加え、AR アプリケーションのダウンロードリンクの QR コードをあしらうなど、現実世界と AR アプリケーションとの連携を促す路面標示のデザインの可能性を探っている。また、同様の対象範囲でまち並み再現 AR を開発している立命館大学塩見研究室との協働も開始しており、今後 AR に用いる CG モデルのデザインやイラストレーションの充実化などに共に取り組んでいく予定である。

No. 4

プロジェクト名（活動テーマ）： 八日市「商店街にぎわい創出」プロジェクト	発表者
提案者：聖泉大学人間学部脇本ゼミ	○
自治体担当者：東近江市商工観光部商工労政課 奥村清和	
連携大学担当者：聖泉大学人間学部 脇本忍	

1. 取組体制

聖泉大学人間学部脇本ゼミ学生と、東近江市商工労政課を中心とした市職員および有志市民のみなさんで構成された。

2. 背景・目的

かつて商業のまちとして賑わった東近江市の八日市地域だったが、生活人口数の低減や大手スーパーマーケットなどの進出により商店街は低迷を続けていた。これらの状況を改善し、まちの新しい魅力創生のために「映画のまち東近江」を提唱してきた。小さな子供たちからお年寄りまで浸透させ、映画を起爆剤としてまちづくりに貢献することを目的としている。

3. 活動内容

当初の活動予定は、八日市の商店街の店を訪問し、店主のみなさんにインタビューを実施した映像をもとにフィクションストーリーを織り交ぜた映像を完成することが主な活動予定だった。しかし、新型コロナウイルスの影響で初期に予定していたインタビューや撮影が実行できず、計画が停滞した。そこで、直接的な対面を避けた素材作りとしてアニメーション作品を制作することにした。

コロナ渦のためにさらに閑散とした商店街を、オバケたちが救うというシナリオで、幼稚園児22名と小学生27人にオバケの原画を描いてもらい映像編集と音楽と声を録音した。オバケがコロナをやっつけるというアニメーション作品「オバケたちがいる！」を完成させ、滋賀国際映画祭2020で上映した。

4. 成果と課題、今後の取組

本プロジェクトは、東近江市の商店街の再生と盛り上げに貢献することから開始された。しかし、予期しないコロナ渦によってフィールドワークを実施することが困難であるため、未来の地域を支える子供たちに、東近江に住む自分の問題として、アニメーション作成の過程でコロナ渦の現況を考えさせ体感させることができた。本プロジェクトは、「映像によるまちづくり」というコンセプトに支えられているため、インタビュー映像からアニメーション映像に変化しつつも当初の目的を訴求することができたと考えられる。

今後の取組として、コロナ渦終息を前提にすると、八日市商店街をはじめとする東近江市全体の商業人口増加と活性化に寄与するため、マーケティング手法としての映像メディアをフルに駆使して、さらには SNS や WEB 環境下でのセールスプロモーション企画を提案したい。

No. 5

プロジェクト名（活動テーマ）： 地域公共交通を維持確保していくためのモビリティ・マネジメントの研究	発表者
提案者：びわこ学院大学 学長 沖田 行司	
自治体担当者：滋賀県 土木交通部 交通戦略課 芝 久生	
連携大学担当者：びわこ学院大学・教育福祉学部 教授・パン ジュイン (発表者：先山 真都梨)	○

1. 取組体制

- ・びわこ学院大学 地域調査プロジェクトチーム
(プログラムの検討、作成、実施、結果とりまとめ、分析)
- ・滋賀県土木交通部交通戦略課
(小学校との連携体制の構築、強化、プログラムの検討、分析の補助)
- ・東近江市公共交通政策課
(小学校との連携体制の構築、強化、プログラム実施の補助、分析の補助)
- ・県内小学校等 (プログラムの実施、分析の補助)
- ・近江鉄道沿線市町 (プログラム実施の補助)

2. 背景・目的

人口減少社会の到来に伴い、全国的に地域公共交通の利用者は減少していく傾向にある。地域住民の大切な移動手段である地域公共交通を維持確保していくためには、利用者増が必要不可欠であり、その中でも特に未来の地域を担う子どもたちが主体的に公共交通の意義や利便性、重要性について普段から継続的に考えるようになることが重要である。

そのため、本取り組みでは、子どもたちが公共交通に対する問題意識を醸成することを目的に、子どもたちに対して公共交通全般について考察するプログラムの作成等を推進する。

3. 活動内容

本プロジェクトは、主として近江鉄道沿線にある小学校にて、公共交通に対する問題意識を醸成するためのプログラムを実施する。2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により9月までは実施できない状態にあったので、スケジュール的には、当初の予定よりかなり遅れたが、9月から10校の小学校のエントリーがあった。実施校と連携してコロナウイルス防止対策を講じながら、9月から11月まで、9校465名の生徒を対象に実施した。

交通環境学習実施例：箕作小学校

開催日時：2020年11月26日（木） 1～4時間目（8:40～12:10）

対象生徒数：86名

学習内容

◆座学（パワーポイント使用）

◎しがけんののりもの

- ・車以外の乗り物の学習
- ・公共交通ってなに？
- ・東近江市の公共交通
- ・バスのことを学習しよう
- ・公共交通〇×クイズ
- ・きっぷの買い方

◆路線バスの乗車体験

◎バスの乗り方

- ・路線バスの説明
- ・路線バスの乗り方、降り方
- ・乗車マナーについて

◎バリアフリーについて

- ・車いすでの乗車体験

◎バスの観察、秘密みつけ

小学校での公共交通学習の様子



4. 成果と課題、今後の取組

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、予定していたスケジュールからは遅れたものの、9月に入ってから10校のエントリーがあり、11月現在、9校で実施することができ、12月11日には、最後の1校で実施する予定である。またプログラムについては、ソーシャルディスタンスを保つために当初に計画していた通りに実行することはできなかったが、本研究の目的は概ね達成できたと考える。

今後は、生徒がより理解しやすいように、紙芝居、寸劇などのプログラムを開発し、また地域の大学と小学校が協力して地域の公共交通について考え、主体的に取り組む場を作り出すことで、地域公共交通の維持・確保につなげていくための体制作り、そして、本事業を持続的な取り組みにするため、県、市、町と大学の連携を強化するとともに、小学校との協力体制を構築していきたい。

No. 6

プロジェクト名（活動テーマ）： 保育園児の農業体験を通じて農業従事者の減少課題について考えるイベントの実施		発表者
提案者	：長浜バイオ大学 農業サークルWALK 土口 修平	○
自治体担当者	：長浜市産業観光部農業振興課 山下 雅之	
連携大学担当者	：長浜バイオ大学 地域連携・産官学連携推進室 熊崎 厚作	

1. 取組体制

農業サークル WALK の本学在学生在が主催し、長浜市、営農組合の協力で実施する。大学近隣の営農組合からは、本事業の活動に必要な農地及び農機具を貸与してもらえることになっている。サツマイモの耕作と育成は、主に農業サークル WALK が行い、収穫やクラフトづくりなどのイベントは保育園児と一緒に実施する。

2. 背景・目的

長浜市内の農業従事者の減少という課題に際し、人材不足の解消を図るためのきっかけづくりを目的に、2019 年度は、地域の保育園児たちとイベントを行い、農業の楽しさを体験してもらった。2020 年度も引き続き農業体験を通して、お仕事の意味や楽しさを感じ取ってもらえるような活動を実施する。

3. 活動内容

5 月 06 日（祝） サツマイモ作付け

9 月 25 日（金） 地域の保育園児とのサツマイモの収穫イベント

9 月 29 日（火） 地域の保育園児との芋版クラフトづくり

*実施日は気候により変更あり

上記のスケジュールをもとに活動する予定であったが、長浜バイオ大学では新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、大学内外を含めた課外活動が禁止になった。そのため、5 月に実施予定であったサツマイモの作付けを 9 月頃に変更することにした。しかし、国内における新型コロナウイルスの感染拡大が終息せず、それに伴い学生の課外活動の活動禁止期間が延長となり、10 月 22 日から条件付きで活動再開が承認された。

しかし、活動条件に「学内外で実施する通常活動以外のイベント等の活動自粛」「他大学や学外団体等との合同練習や練習試合、遠征、交流企画等の実施や参加の自粛」があることから本事業を実施することが困難になった。また、大学担当者と話し合い、「地域の保育園児たちとの交流」を行うにあたって十分な感染予防対策が取れないこと、また借用している農地の管理ができないという結果になったため、当プロジェクトを実施しないことに決定した。

4. 成果と課題、今後の取組

今回は、新型コロナウイルスの感染拡大の予防措置が十分に取れないとしてプロジェクト中止しました。具体的な中止理由として「肉体労働のため常時マスクの着用は難しい」「大学生との触れ合いも目的であるため3密を避けることができない」「野外での活動のため十分な手指消毒をすることができない」「農地の管理ができない」などがあります。

コロナ禍の中であっても農業従事者の減少は重要な地域課題です。次年度の活動方針ではwith コロナを意識し、こんな時代だからこそ実行できる事業計画のもと課題可決に取り組んでまいりたいと考えています。

No. 7

プロジェクト名（活動テーマ）： 訪日外国人旅行者（インバウンド）に向けた草津の魅力発信 ～ふらっと寄りたい草津旅～	発表者
提案者：龍谷大学理工学部 実習講師 岩嶋 浩樹 （発表者：加藤紗耶）	○
自治体担当者：草津市 商工観光労政課 重政 宇政	
連携大学担当者：龍谷大学理工学部 実習講師 岩嶋 浩樹	

1. 取組体制

・龍谷大学

ハード・ソフトウェアを用いた観光誘致コンテンツ作成へ向けた検討

・草津市役所

参考資料の提供、撮影場所の許可申請、市役所のホームページへの情報を掲載、その他の関連機関や企業への掲載依頼や紙媒体設置依頼

2. 背景・目的

昨年は訪日外国人旅行者に関する調査の情報収集をすることで、集客方法についてまとめた。次に草津市には魅力があるにも関わらず、あまり認知されてない事が判明したため、それらを併せた情報発信の手法を考えた。

以上より、今年度は昨年度の成果を元に草津市の訪日外国人旅行者増加を目指すために、情報発信コンテンツを作成に向けた検討を行った。

3. 活動内容

【当初の活動予定】

訪日外国人旅行者が行きたいと思うパッケージツアーの提案を行い、パッケージツアーを体験した様子をホームページ上でコンテンツとして配信する。また、SNS を活用することによって草津市の認知度を上げる。

3月～6月：パッケージツアーの検討・作成

6月～7月：現地撮影と構成（写真撮影、動画撮影、ホームページ作成など）

7月～10月：データ構成と制作（SNS、ホームページなど）

10月～11月：発表としてまとめる

【実施に向けての検討】

新型コロナウイルスの影響によりグループワーク及び現地での撮影等が困難であった。そのため、Zoom を介したオンラインでの活動を行った。また、次年度、ホームページの作成や SNS による情報発信を実施するための検討を行った。さらに提供するコンテンツに AR 技術の導入を検討した。

4. 成果と課題、今後の取組

今回の検討により以下のような成果や課題が得られた。

新型コロナウイルスの影響により、現状では訪日外国人旅行者の獲得は期待できない。また、終息後も主要都市など、人が集まりやすい場所を避けたがる旅行者が多くなると予想できる。

そのような人に草津を周知してもらうためには、草津の魅力を発信し、知ってもらうことが重要であることがわかった。また、草津市を知ってもらうための情報発信コンテンツが必要だと考えられる。

今後の取り組みについては、実際に草津市を訪れて動画や写真の撮影を行い、情報発信コンテンツに取り入れる。また、草津市魅力マップの作成、AR 技術を利用した楽しめるコンテンツの作成を行う。

以上

プロジェクト名（活動テーマ）： 大学生による子どもたちへの性犯罪予防の SNS の使い方啓発活動 ～S（スマート）にN（ネット）を使えばS（スマイル）に～		発表者
提案者	：内藤 紀代子 びわこ学院大学 教育福祉学部 子ども学科	
自治体担当者	：藤澤 隆二 滋賀県総合企画部 県民活動生活課 消費生活・安全なまちづくり係	
連携大学担当者	：橋山 ゆず波 びわこ学院大学 教育福祉学部 子ども学科	○
他メンバー	：久野 翔瑚、吉田 桃香、岩本 彩花、池沼 百音、大熊 夏音 伊藤 七海、伊藤 美咲、寺澤 萌花、村木 いる香、山田 美里 びわこ学院大学 教育福祉学部 子ども学科	

1. 取組体制

滋賀県総合企画部
県民活動生活課消費
生活・安全なまちづ
くり係と滋賀県警の
ご指導を受けて、び
わこ学院大学の学生
がネット犯罪予防の
知識を習得し県下の
教育機関で出前講座
を実施する。

子どもたちへの性犯罪予防のSNS使用の啓発活動の取り組み体制



2. 背景・目的

滋賀県は、スマートフォンやパソコンの所有数量が全国第1位である。しかし、子どもや女性が性犯罪に巻き込まれる被害も増加している（H30年度の789件：参考滋賀県HP）。性犯罪の多くがSNSと関係しているため、ピアサポート効果を期待して大学生が安全なSNSの使い方を小中高生に講演やワークショップを行ない性犯罪予防の啓発を行なう。

3. 活動内容

滋賀県警察サイバー犯罪対策課が養成している「滋賀県警察サイバーボランティア」の教育訓練を受けた大学生が、大学の教員指導のもとでネットやSNSを介しての性犯罪やトラブルに巻き込まれないための教育講演のスライド作成や教育プログラムを作成し啓発を実践する。

実施は、要請を受けた滋賀県下の小中高校やイベント等で行う（イメージ図を下記に示す）。

大学生による安全なSNSの使い方啓発活動の成果



4. 成果と課題、今後の取組

①啓発活動に向けての大学生育成の成果

- 啓発活動に向けての教育訓練：滋賀県警察サイバー犯罪対策課が養成している「滋賀県警察サイバーボランティア」の教育訓練を受けた大学生が **3名**
- 活動メンバーの強化と増員：教育訓練を受けた大学生からレクチャーと大学教員からネットトラブルや犯罪に関する講義を受け活動に備えた大学生が **8名**

* 上記の **11名**が、滋賀県下の教育施設で「性犯罪予防のSNSの使い方」啓発活動の出前講座を実施する準備が 今年度完了

②啓発活動の実践の成果

- 啓発活動の実績

実施日	教育機関場所	対象児童・生徒数	実施大学生数
7月9日	栗東市内中学校	80名	1名
7月15日	甲賀市内高校	110名	1名
7月15日	甲賀市内高校	70名	1名
7月22日	守山市内小学校	68名	1名
9月24日	東近江市内中学校	164名	2名
10月14日	蒲生郡内中学校	160名	2名
11月4日	蒲生郡内高校	151名	2名
11月19日	彦根市内高校	320名	1名
12月2日	近江八幡市内中学校	35名	2名

* 現在、**9校で1158名**の児童・生徒を対象に出前講座を述べ**13名**の学生が 実施完了

③今後の取り組みの予定

- 教育機関での出前講座：現在、依頼が来ている2校の高校での出前講座実施
- 次年度の保護者向け出前講座：現在、バージョンアップしたスライドの作成に取り組んでいる。また、次年度のイベントや出前講座の企画を行なっている。

プロジェクト名（活動テーマ）： 就学前児童から科学の面白さを体感させる 実験・ものづくりプロジェクト		発表者
提案者	： 平原 悠成 （びわこ学院大学 4 回生）	○
自治体担当者	： 寺畑 由裕 （大津市科学館）	
連携大学担当者	： 澤井 二三夫 （びわこ学院大学）	

1. 取組体制

本大学の箱家研究室のゼミ生（3 回生 4 名、4 回生 5 名）で「サイエンスチーム」を立ち上げ、ゼミ活動の一環として実践をしている。学生は、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭や児童クラブ（学童）の指導員など、子どもに関わる仕事を目指す学生たちである。

本番に向けて、月 1、2 回の準備、リハーサルを行ってきた。実験、ものづくりの内容は、小中学校の理科教育とのつながりを意識させながら取り組み、「子どもへの問いかけ」「演示方法」「実験方法」「ものづくりの手順」など綿密に話し合いながら、児童の興味関心が高まるような内容や手順を模索し、安全性を重視して進めてきた。

2. 背景・目的

就学前児童や小学生が、身近な素材による科学実験やものづくりに関わる機会は少ない。小学校 3 年生からの理科では「ものづくり」が必須であるが、実際の授業では、既製のもので作らせているのがほとんどである。安全面や準備の時間を考慮すれば、そうせざるを得ない実状がある。

そこで、大津市科学館や児童クラブ（学童）などを会場にして、児童やその保護者を対象に身近な素材を使った科学実験やものづくりを行い、科学の面白さを感じさせ、興味を高める取り組みをしていきたいと考えた。具体的には、大津市科学館で月 2 回継続して実施し、さらに夏休み中は児童クラブ（学童）での開催を行なった。

3. 活動内容

新型コロナの影響で、計画は大幅に削減されてしまったが、11 月中旬まで次のとおり実施することができた。

（1）「こすって、ふるわせ、水に浮かぶ“え”」

①令和 2 年 8 月 1 8 日（火）10:00～12:00

②大津麗湖こども園 参加人数 児童 14 名 スタッフ 5 名

③「クリップを方位磁針に」「音の振動で動くへビ」「糊を使って絵を水に浮かばす」の 3 つの実験を行なった。

④2 時間あまり子どもたちは夢中で作ったり、触ったりして喜んで遊んでいる姿が見られた。これらの実験は家庭でもできるものとしてスタッフに詳しく作り方を紹介した。



(2)「空気でたおそうポンポンポン」

①令和2年10月3日(土) 13:10~13:35

②大津市科学館 参加人数 児童4名 保護者4名

③ペットボトルと風船のゴムを使い、風の力で“的”を動かす空気砲づくりである。

④製作と遊びが20分程度で済むように事前準備を行なった。

最後には、巨大空気砲で風の力を体感させた。



(3)「パタパタロボット」

①令和2年10月17日(土) 13:10~13:35

②大津市科学館 参加人数 児童12名 保護者8名

③磁石のSとNの性質を利用したものづくりである。

④磁石の引き合う、反発し合う性質を使ったおもちゃで、紙で作ったロボットを動かすたびに、パタパタと足や頭を動く面白さが特徴である。



(4)「音なくないコップ」

①令和2年11月7日(土) 13:10~13:35

②大津市科学館 参加人数 児童12名 保護者7名

③エナメル線と磁石、コップを使ってスマートフォンのイヤホンを作製した。

④身近なデジタル素材が、基本的な電流の働きであることを小さな子どもも楽しめるようにした。紙コップから音楽が流れ出したときには会場から歓声が沸いた。



4. 成果と課題、今後の取組

- ・コロナ禍の中、動画やYouTubeでの紹介も考えたが、やはり子どもたちが実物を見て、触り、直接教えてもらうという五感を使ったものづくりや実験だからこそ、感動や喜びがあると考えて、8月以降の活動となった。
- ・「ものづくり」は子どもの思考を活性化し、集中力を高めるのに適切な活動といえる。特に学校外で行うことで子どもの興味や関心をより高める効果が期待できる。
- ・大学が大津市科学館と連携してイベントに定期的に参加をすることにより、まず、科学館の集客が期待できる長所があげられる。また、学生にとっても、親子を相手に演示したり指示や説明をしたりできる機会が得られ、さらには子どもと接する機会が増えて、大きな刺激となり学びの場が広がったことは大きな収穫である。
- ・様々な実験やものづくりは、子どもの安全面や興味関心、さらには小学校理科とのつながりを意識して、時間をかけて準備してきたものばかりである。演示実験や会場に来て参加する人数は限られているので、今後より広めていくためには、ものづくりの後に実験の材料や遊び方を記載した資料を配付していく取り組みが必要と思われる。



プロジェクト名（活動テーマ）： 「お弁当ラリー」を通じた「大津ナカマチ SDGs 商店街」プロジェクト		発表者
提案者：滋賀県立大学「大津ナカマチ SDGs 商店街」プロジェクト 滋賀県立大学大学院環境科学研究科 2 年大賀雄介、 滋賀県立大学環境科学部 3 年下口晴輝、同 2 年平田裕一		○
自治体担当者：大津市役所・商工労働政策課・望月隼		
連携大学担当者：滋賀県立大学地域共生センター 地域連携コーディネーター・谷口喜之		

1. 取組体制

- ①滋賀県立大学「大津ナカマチ SDGs 商店街」プロジェクト：まち歩きコンテンツ企画・実施・開発
- ②滋賀県立大学：大津市との連携協定に基づき副専攻地域共育プログラムや環びわコンソ科目におけるフィールドワーク先として位置付ける等して学生・教員のかかわり・指導を促進・担保。
- ③大津市役所：事業の広報
- ④滋賀トヨペット Boss 百町物語：ナカマチ商店街を構成する丸屋町・菱屋町・長等各商店街と大学との窓口として各種調整、学生チームへの助言

2. 背景・目的

大津市ナカマチ商店街は、生活様式の変化、周辺商業地との競合、空き店舗の増加等により活力が減衰する状況にあるが、歴史や町並、各店舗に着目すると他にはない魅力があることが分かる。そこで、商店街の資源をつなぐコンテンツを開発することによりまちの魅力を発信し、近隣に居住する子育て世代や観光客の取込みを図る。

3. 活動内容

提案書提出時点では「1)参加者が商店街を巡り、食材等を買集めながら、店主との対話を通じて地域や商品の魅力に触れる。2)食材を折箱に詰め、商店街の魅力が凝縮したオリジナル弁当を作る。3)写真を SNS などで発信する。以上のイベントを「お弁当ラリー」と名付け、学生チームが商店街関係者と連携して数回にわたり企画・運営・実施する。実施結果をもとに観光・まち歩きあるいは地域学習コンテンツとして開発・定着させる」と記載し、順次実行する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響によって、活動の見合わせを余儀なくされた。

そこで、今年度はイベントの実施を主目的とするのではなく、「お弁当ラリー」というコンテンツを、学生イベントとしてでなく、商店街において日常的に提供できるサービス・コンテンツとして確立するための方策について検討を進めることにした。

4. 成果と課題、今後の取組

学生による単発のイベントとしてではなく、商店街の恒常的なコンテンツ・サービスとして確立できるよう検討を進める中で、当初から取り組み体制に加わっていただいている連携先に加えて、財務省近畿財務局大津財務事務所並びに公益財団法人滋賀県産業支援プラザからは、「お弁当ラリー」を持続可能なビジネスモデルとして展開することについて、担当者レベルで連携・支援の申し出を頂いたところである。

一方、ナカマチ商店街においては、新型コロナウイルス感染症拡大の状況を見極め、かつ、with コロナの工夫をおこないながら、1月中にも「Go to 商店街」事業としてイベント実施を予定されるなど、商店街におけるイベント実施に向けた道筋も開かれつつある。また、滋賀県立大学では、当プロジェクト発足のきっかけとなったフィールドワーク科目「地域デザインA」を2月下旬に実施する予定であり、引き続きナカマチ商店街もそのフィールドワーク先となっていることから、この授業で行われるナカマチ商店街でのフィールドワークと連動させて、学生対象の「お弁当ラリー」を実施することとし、それに向けた調整・準備を進め、活動の「再起動」に向けて取り組んでいるところである。

なお、2020年11月21日に滋賀県立大学主催により開催された「キャンパスSDGs びわ湖大会」において、学生による地域と連携したSDGsに関わる取組として事例報告をおこなった。

お弁当ラリー・今後の展開

コロナに負けない持続可能なプロジェクトに向けて再起動！

- 新型コロナの影響で一時足踏みしていたが、**現在、再起動に向けて準備中。**
- さらに様々な人たちの力や知恵を借りながら、学生による単発のイベントではなく、商店街が常時訪れる利用客などに対して**毎日でも提供できる持続可能なサービス・コンテンツにすることを目指す**。
- 将来は参加者による「お弁当写真コンテスト」や、地元町家ホテルなどと連携した観光コンテンツ、地域SDGs学習事業等への展開を図りながら、**持続可能な「SDGs 商店街」の実現に貢献したい。**



No. 11

プロジェクト名（活動テーマ）： 「市」を通じた地域の活性化—中山間の「位置」エネルギーを創出—	発表者
提案者：龍谷大学農学部 淡路和則	○
自治体担当者：東近江市農林水産部 中西安治	
連携大学担当者：龍谷大学農学部 淡路和則	

1. 取組体制

龍谷大学農学部の淡路研究室が中心となって、合同会社グリーンラボラトリー、地元自治会、と共同して、百済寺地区での資源の掘り起こしと市の開催運営を行う。人の流れや訪問についての意識やニーズを把握する調査については、愛の田園振興公社、百済寺の協力のもと、淡路研究室が実施する。

2. 背景・目的

農業の衰退、高齢化、過疎化が深刻化する中山間地域の無形・有形の資源を多角的に見出し、ひとに来てもらい、モノ消費、コト消費につなげて地域を活気づけることが重要である。そのために、ひととモノが集まりイベント等も楽しめる地域固有の特色ある「市」を開催し、地域色豊かな商品の開発、交流人口の増加を促す。

東近江市の山間部の百済寺地区において、①地域の特色あるモノ・コトを住民と学生が共同で掘り起こし、②商品開発、行事等の企画開発を行い、③地域の特色を出す「市」を企画する。④道の駅等の客数、百済寺の参拝客数の調査、愛東でのトラベル調査を行って人の流れと訪問意識を把握し、⑤「市」の効果的な開催の時期を検討する。⑥そのうえで「市」を開催し、来場者からの評価を分析して地域農業と「市」の展開戦略を構想する。

3. 活動内容

＜当初の活動計画＞

- ①令和2年4月～8月に地域資源の掘り起こしを行う。
- ②初夏に百済寺のマルシェに参加し、秋にも百済寺地区で市を試行的に実施する。
- ③上記のイベント会場において来場者にアンケート調査を実施し、百済寺および周辺地域への関心やツーリズム・ニーズを探る。

＜実際の活動内容＞

新型コロナ感染拡大によって、地元での催しものがすべて中止となり、現在もイベントが開催できない状況となっている。そのため、地元のマルシェ関連のイベントへの参

加も「市」を開催することも断念せざるを得なかった。また、移動の自粛や観光施設等の営業や入場者の制限が行われているなかでの調査等も実施が困難であった。

こうした状況の中で、できることとして、下記の活動を実施した。

1) 地域についての勉強会・意見交換会

百済寺樽プロジェクト代表者、JA 湖東営農指導担当者の 2 名に大学にお越しいただき、百済寺郷の自然条件、歴史と現在抱えている問題についてレクチャーを受けて地元理解を深めるとともに、意見交換を行い、地域おこしにむけてのアイデアを出し合った。

2) 百済寺地区訪問

研究室の 3 年次学生は、愛東ならびに百済寺に行ったことがないことから、現地理解のために百済寺地区を訪問した。現場を案内されて話を聞くことによって、大学でのレクチャー等で知った課題を実感することができた。



大学での意見交換会



百済寺訪問

4. 成果と課題、今後の取組

大学での勉強会および意見交換会、百済寺地区訪問によって、地域のイメージをもつことができ、現状と課題に対する理解を深めることができた。

「市」に関するイベント等の取り組みができない状況がしばらく続くと予想されることから、今年度のこれからの活動については、百済寺とその周辺地域についての認知度とツーリズム需要を把握することに目標をシフトさせて活動を行う。

具体的には、周辺地域で入れ込み客数が多い道の駅「あいとうマーガレットステーション」等でアンケート調査を実施して、百済寺地区への人の流れをつくる誘因となる要素を明らかにしたい。

No. 12

プロジェクト名（活動テーマ）： 甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）の魅力を創造する旅、 甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）から発信する「すべての人に健康と福祉を（SDGs）」	発表者
提案者：渡辺 十那海、西川 幸佑	○
自治体担当者：久保 重徳（甲賀市農業振興課）	
連携大学担当者：岡本 直輝（立命館大学スポーツ健康科学部）	

1. 取組体制

○立命館大学スポーツ健康科学部に甲賀市地域連携チームを設けた。

メンバーは、学生（学部生&大学院生）と教職員の9名で構成している。

○立命館大学スポーツ健康科学部10周年企画として進め、学部内で甲賀市への理解を深めた。
今後、甲賀市民の健康増進について連携できる機会にしたいと考えている（現在、健康教室などの支援を行っている）。

○大学と連携するサポート窓口は、甲賀市産業経済部農業振興課とする。

○その他：事業においては、本プログラムと甲賀市が年間スケジュールを調整し進めている。特に信楽・土山地域の農家や農業団体へのコーディネートは、甲賀市に行っている。

2. 背景・目的

甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）の香りは、1煎目ばかりでなく2煎目3煎目でも楽しむことができると言われている。これは葉の持つエネルギーが他の銘柄茶よりも高いことが理由である。しかし、多くの若者は、日本茶をゆっくりと味わう機会を持っていない。さらに、お茶を淹れた後の出がらしをゴミとして廃棄することがほとんどであり、再利用するといった発想を持っていない。この点に着目し、SDGsに関連させた取り組みを検討した。またコロナ禍の中で、茶葉に含まれるカテキン類がコロナ無害化の効果があるといったことが報道されていることから、お茶がさらに注目されるのではないかと考える。

そこで本プログラムの目的は、甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）が有するエネルギーを飲み味わうばかりでなく、出がらしの再利用を創造することとする。特に健康運動、スポーツ活動を実施する者や選手が、出がらしの再利用を意識し、コンディショニングづくりに役立つ利用方法について検討する。

3. 活動内容

○4月～7月：コロナの影響により、全く対面授業が行われなかったことから、WEB（ZOOM）を用いて企画の情報共有のみを行った。

○8月：WEB 会議の中で、下記の点について確認し各参加者が独自で活動を行った。

- ・スーパー、商店街でどのようなお茶が販売され、どのような加工品が販売されているのかを調査した（お茶コーナーの前では、様々なお茶の香りで癒されるなどの意見があった）。

- ・煎茶、緑茶、ほうじ茶、麦茶、番茶等を飲み、味を比べてみた。

○9月：甲賀市政策推進課との会議を行い、さらに農協（JA）で販売されているお茶（朝宮茶、土山茶）を購入した。

- ・朝宮茶、土山茶の試飲会を毎週開催した。

- ・信楽焼の茶香炉を購入し、茶香を楽しんだ（ほうじ茶の香りに癒されるといった意見が多かった）。

○10月～現在：茶畑見学&加工工場の見学を行った（甲賀市の協力を頂いた）。

- ・毎週、お茶会を開催し、出がらしの再利用について意見交換を行っている。

- ・出がらしを用いたレシピの提案している。

（クッキー、パンケーキ、オートミールケーキ、ごはん用ふりかけ、出がらしを入れてご飯を炊く、出がらし&大根漬物等の報告を行ってきた。）

- ・一煎目出がらしを用いた茶香、二煎目出がらしを用いた茶香（朝宮茶は、2煎目でも香りはある）について観察を行っている。

- ・乾燥出がらしを用いた消臭（野球シューズ、バスケットボールシューズを対象）効果を検討している。

（消臭効果はあるが、乾燥出がらしを作るのに手間がかかりスポーツ選手は実践しないだろうと考える。また出がらしを部屋干しすると、カビが出る可能性が高いことが分かった）

4. 成果と課題、今後の取組

現在、①出がらしを用いたレシピの提案 ②嗜好用 ③消臭用の3点でアイデアを出し合っている。他府県の茶葉の中で、朝宮茶（高級）の人気度は高い＜20～50歳女性への試飲アンケートによる＞。また出がらしを調理せず、直接食べることを試みた。この試食においては、最も食べやすいのが「朝宮茶」であった。2煎目出がらしに塩をふりかけて食べると、茶葉の香りとさっぱり感（口内の雑菌が除去されたような感覚）が好きだといった意見が多く出された。特に試合前など緊張した状態からリラックスした状態になるために、出がらしを食べると効果があるのではないかといった意見が多く出された。

今後、健康運動&競技スポーツに応用できそうなメニューや再利用法に焦点を当て、まとめていきたい。



No. 13

プロジェクト名（活動テーマ）： 国史跡紫香楽宮跡を活かした地域振興について	発表者
提案者： 紫香楽宮跡整備活用実行委員会 実行委員長 水野藤志夫	
自治体担当者：甲賀市 歴史文化財課 課長 鈴木良章	
連携大学担当者：立命館大学 経済学部 教授 黒川 清登	○

1. 取組体制

「紫香楽宮跡活用委員会」を発足。体制は以下。

会長：雲井自治振興会長

実行委員長：水野藤志夫 紫香楽宮跡整備活用実行委員会 委員長

事務局：金谷英三 新事業企画実行委員会 委員長

顧問：里見淳 市議会議員

協力：立命館大学経済学部 黒川ゼミ「紫香楽宮まちづくりチーム」

甲賀市歴史文化財課、宮町営農組合

2. 背景・目的

甲賀市信楽地区には、国史跡紫香楽宮跡、日本遺産「忍者」の構成文化財である飯道神社をはじめとした貴重な地域資源が集中する地域であるにも関わらず、これらが必ずしも活かされず地域振興に結び付いていない。

立命館大学では、2018 年春から本格的に調査協力を開始し、紫香楽の宮跡の活用方法を模索してきた。雲井自治振興会との史跡活用ワークショップを重ね、2019 年春には、紫香楽宮跡の活用に地域住民は、積極的であることが明らかになった。

2020 年には、私有地となっている史跡の一部を、甲賀市が買い取り、史跡公園を 5 年後を目途に運用する方針が定まり、本委員会の設置が決まった。同地区には、これまでも都あかり、天平ふれあいマーケットなど紫香楽宮跡に関連する多彩な季節のイベントがあり、これらの既存のイベントも含め、まちづくりに紫香楽宮跡を積極的に活かすことを目的としている。

3. 活動内容

紫香楽宮跡の宮町地区を甲賀市が買い取り、史跡公園の設置検討が始まった。コロナが鎮静化した 9 月からは、以下のように本委員会が本格的に活動を開始した。

第1回開催：2020年9月25日金曜 19:30-21:30 甲賀市 黄瀬文化財作業所

紫香楽宮跡活用委員会の立ち上げ（学生は Zoom 参加）これまでの紫香楽の宮活用のレビューと今後の Zoom 活用方法

第2回開催：2020年10月23日金曜 19:30-21:30 甲賀市 雲井自治振興会館

活動計画の検討：跡地活用時の鹿による花壇への被害報告、ハーブ植栽の検討、大学チームは、来訪者へのアンケート調査

第3回開催：2020年11月27日金曜 19:30-21:30 甲賀市 雲井自治振興会館

活動組織体制、令和3年度の活動方針検討（遺跡でのハーブ植栽とハーブティ事業、軽トラ市など）、大学チームのインタビュー調査実施報告とアンケートによる来訪動機調査、ハーブ植栽と軽トラ市による来訪客のもてなしを検討。次回は、これらのアイデアをもとにストーリー化を検討。

第4回開催：2021年1月を予定

また、立命館大学の学生チームは、紫香楽宮跡、忍者などの観光資源の活用を図るべく、以下の調査研究活動を行っている。

- （1）「信楽のこれから - 紫香楽宮遺跡を活用して」（WEST 論文大会*で発表 2019 年 12 月発表済み）3 回生を中心とした学生グループ：遺跡発掘に着目した遺跡活用の可能性を提言。
- （2）「遺跡を活用した地域経済活性化ー滋賀県甲賀市史跡紫香楽宮を事例に」（WEST 論文大会で発表 2020 年 12 月 12 日）3 回生を中心とした学生グループ：来訪動機をアンケートで解明中
- （3）国際忍者学会での忍者を活用したまちづくりの発表（2021 年 2 月発表予定）
 - ア）防災訓練の実施に対する忍者の知恵の活用・防災マインドを持続させる忍者の動きを事例として
 - イ）現代に生きる忍者の知恵を活かしたメンタルヘルスケアの可能性・甲賀市の忍者愛好家と大学生を事例として・

*WEST 論文大会：大学間対抗の研究論文発表会で、毎年 12 月に発表会を開催

プロジェクト名（活動テーマ）： 神仏習合の里、甲賀杣谷のストーリーブックをつくる		発表者
提案者：立命館大学院 理工学研究科 幡野 遥		○
自治体担当者：甲賀市役所 歴史文化財課 佐野 正晴		
連携大学担当者：立命館大学 理工学部 武田 史朗		

1. 取組体制

立命館大学景観建築研究室、福生山櫟野寺、甲賀市歴史文化財課の連携で取り組む。立命館大学の学生および指導教員が主な実働を担う。櫟野寺と甲賀市が、歴史文化の情報提供、地域の関係者へのヒアリング許諾などの仲立ち、寺院や市役所のホームページ上での掲示や観光産業への紹介他、成果の発信などを行う。当初は、大原学区を中心とするネットワークで、地域住民の方々や、周辺社寺などの皆様に、ヒアリングやワークショップを行うことを通した取り組みを想定していたが、コロナ禍の影響より、現在までのところ、研究室単独での文献調査と、一部の研究機関へのヒアリングによる取り組みとなっている。

2. 背景・目的

甲賀市、杣川沿いの地域は、古代・中世の自然への畏れと敬いを今に伝えている。有形無形の文化（神仏習合・密教など）を受け継ぎ、もたらされた環境に学ぶべき資源が多い。こうした歴史背景は目に見えにくいだが、地域・広域にその価値が十分に認知されるべきである。そこで、一般にもわかりやすく伝える手軽な媒体を製作したいと考えた。杣谷に関しての資料は少なく、実際の歴史的背景を辿っていくことは難しい。そこで、本活動は、様々な分野の既往研究の調査や住民に対するヒアリングを行い、仮説的なストーリーをつくり上げることを目的とする。

3. 活動内容

活動内容としては次のような順序で進める予定であった。①個々の神社仏閣の由緒や歴史背景、杣街道の歴史、言い伝えを既往研究や関係者、学識者へのヒアリングで調査する。②地域の過去と未来に向けたストーリーを描くワークショップを行う。③結果を一般の人々がとりつきやすい内容と分量のストーリーブックにまとめる。④成果を市役所や地域の社寺に設置することを依頼し、可能であれば、ブックレットやHPのコンテンツとして広く伝える手段を講じる。

当初の予定では、大原学区の集いや市民団体主催のイベント等に足を運び、オーラルヒストリー（口述歴史）を組み立てるつもりであった。しかし、新型コロナウイルスの拡大防止のため、参加予定であった大原円卓会議が延期されたことにより、市民の方の間でも外出や人との接触に懸念を持たれていると判断した。それにより、今年度の春から夏にかけては文献調査を中心に行うことにした。秋口からは、大人数の集会は避け、有識者の方を中心に個人でアポイントを取って直接お話をうかがったり、史料・資料を見せていただいたりするように活動内容

を変更した。具体的に訪問したのは、甲賀市くすり学習館・館長の長峰さん、油日神社・瀬古さん、みなくち子どもの森自然館・学芸員の川瀬さん、櫟野寺・住職の三浦さんである。

4. 成果と課題、今後の取組

文献調査と一部の研究機関へのヒアリングにより、様々な分野の情報から杣川流域に関して知識が深まってはきているが、それぞれの歴史的出来事の点を結び付けられる段階にまでは及んでいない。よって、集まった知識間を繋ぐような分野や年代を中心にヒアリングを行う必要があると考える。今後は、木挽き職人の家系の方や、周辺社寺、地理学者等の知識を持つ人を中心にヒアリングを行い、資料をまとめていく予定である。

現時点での成果は下記に記すものである。

- ・杣川は、南鈴鹿連峰の油日岳に源を発し、甲南町の中央を東から西に流れ、水口町の西はずれで、野洲川に合流する。

- ・江州甲賀郡絵図と滋賀県農業試験場による土地分類基本調査の土壌図を元に作られた甲賀地域の土壌マップから、油日の辺りに林業が始まる前の古い時代から、広い草原があったことがうかがえる。現にシオノギ植物園の辺りから、野焼きが行われていたことがわかる黒ボク土が採取されている。

- ・2005 年に甲南町新治の新名神高速道路工事現場で発見された、加工痕のある巨大な杉の埋もれ木には、復元すれば直径約 1 m40cm になる巨木もあった。根元には鉄斧による伐採痕が残っており、他にも製材途中の原材などが含まれていることから、この付近で伐採・製材作業が行われていたことが分かった。これらの木材は、年輪年代測定によって飛鳥時代（630～690 年頃）のものである。

- ・正倉院文書には、甲賀杣に関する記載が多く見られる。

- ・天台宗を開いた最澄が比叡山に根本中堂を建立するための用材を甲賀に求めたという伝えがある。この際に安置されたのが、櫟野寺の坐仏十一面観音菩薩である。

- ・杣川流域には、「杣」や「杉」が付く地名が多い。

- ・一般に甲賀忍者と呼ばれる集団（甲賀武士）は林業や土木の技術も持ち合わせていた。戦国時代の彼らの拠り所となっていたのが油日神社である。

- ・流域の大部分が古琵琶湖層群の重粘土地帯である。杣川は下刻が著しく、本流から取水できるのは河川沿いのごく一部に限られる。水利形態はため池と天水に依存するため、ため池が多く開かれる。

- ・油日神社は一時、川枯神社と呼ばれていた。（甲賀歴史民俗資料館に保存されている右の絵図に記述されている。）現在も残る祭りは雨乞いに由来している。



No. 15

プロジェクト名（活動テーマ）： 芦浦観音寺納豆再現プロジェクト	発表者
提案者：立命館大学 食マネジメント学部 鎌谷かおる	○
自治体担当者：草津市環境経済部・商工観光労政課 井上博道	
連携大学担当者：立命館大学 総務部 BKC 地域連携課 笠倉研	

1. 取組体制

代表者：鎌谷かおる（立命館大学食マネジメント学部・准教授）

研究協力者：納豆研究グループ（鎌谷研究室研究補助員上田朋佳及び同研究室学生）

西川浄海（芦浦観音寺・住職） 高橋大樹（大津市歴史博物館・学芸員）

大田壮一郎（立命館大学文学部・教授）

研究アドバイザー：八杉淳（草津宿街道交流館・館長）

2. 背景・目的

【本課題の背景】

気候や風土の異なる地域で育まれてきた郷土食は、長い歴史の中で、どのように変化してきたのだろうか。本課題は、地域で生まれた「食」の変化を丁寧にたどることによって見えてくる、人と食の向き合い方の歴史を、納豆を事例に紐解こうとするものである。

【本課題の目的】

本課題は、草津市の芦浦観音寺でかつて製造されていた納豆を、①寺院と食、②近江国の農業生産の歴史、③嗜好品としての納豆製造の観点から分析し、地域における食の在り方の歴史を総合的に解明しようとするものである。分析結果を通じて、草津市の名産品としての納豆製造の実現化について模索することも視野に入れている。

3. 活動内容

（1）2020 年度の活動計画と内容

本課題では、2020 年度に主に以下の2つの活動を計画していた。①納豆関連古文書の勉強会（年4回）②草津市域の農業生産に関する古文書の調査。新型コロナウイルスの影響により、以下の通り、若干計画の修正をおこない実施している。

①納豆関連古文書の勉強会

新型コロナ感染防止対策のため実施を控えた。状況が落ち着き次第開始を試みる予定である。

②草津市域の農業生産に関する古文書の調査

既存資料等からの文献収集を中心におこなった。今後、新型コロナウイルス感染の状況が落ち着き次第、県内の史料所蔵機関での古文書調査を再開する予定である。

③対象地域の「豆」文化の分析

2020 年 2 月から 3 月にかけて実施した対象地域での味噌作り調査の整理及び分析作業をおこなった。また、納豆に関する聞き取り調査データの整理作業を同時におこない、観音寺周辺地域における納豆を含む「豆」文化について検討をおこなった。

(2) 実施に向けての検討

- ①納豆関連古文書の勉強会については、新型コロナの終息次第今年度後半から開始できればと考えていたが、状況的に難しいと思われるため、年度内に zoom 等オンラインベースで開催を開始することを検討している。
- ②農業生産に関する古文書の調査については、①と同様の理由により史料所蔵機関や現地調査の実施を先に延ばし、既存資料や文献から収集作業を先行しておこなった。既存資料でも多くの資料を集めることができ、今後もこの作業を継続しておこなっていく予定である。

4. 成果と課題、今後の取組

[成果と課題]

- ① 芦浦観音寺周辺における食文化の中に、納豆などの豆食文化がどのように育まれ定着したのかということについて、文献・聞き取り調査の結果から明らかにすることができた。ただし、中世・近世期の状況については、いまだ解明できていない点もあるため、今後古文書調査をおこなっていく中で、具体的に解明していきたい。
- ② 対象地域と日本列島各地の納豆食文化の比較検討をおこなった。その結果、納豆作りの準備や食べ方の違い等、少しずつ特徴が見えてきた。今後、新型コロナウイルスが落ち着き次第、聞き取り調査を再開し、更なる実態解明を目指したい。

[今後の取組]

今年度は、新型コロナウイルスの影響により、対面でおこなう調査を自粛していたが、その分、調査データの取りまとめやそれを用いた分析、文献の収集を進めることができた。これらの作業は、次年度予定している納豆ガイドブックの素地になるものも多い。今年度はこうした作業を中心にすすめ、基礎資料の収集と、基礎データの作成を積極的に進めていく予定である。

大学生が見つけた 滋賀のSDGs

大学や学部・学年の異なるチームメンバーで構成された参加学生が、滋賀県を中心に様々な活動に取り組む企業やNPOの方にインタビュー。SDGsの観点から記事を執筆しました。

- | | | |
|--------|---|---|
| team1 |  | 心のままに生きることこそが「性」「コンドマスター」が滋賀にいた
清水美春さん(滋賀県高校教諭) |
| team2 |  | 子どもたちに「居場所」を与える こどもソーシャルワークセンター
NPO法人 こどもソーシャルワークセンター 代表 幸重忠孝さん |
| team3 |  | たねや・クラブハリエ 自然の恵みから美味しいお菓子を
たねやグループ |
| team4 |  | 彦根「みんなの食堂」 コロナ禍の高齢者や生活保護受給者に弁当配布を開始
NPO法人 芹川の河童 みんなの食堂 |
| team5 |  | 琵琶湖で学習航海 滋賀県立びわ湖フローティングスクール
滋賀県立びわ湖フローティングスクール |
| team6 |  | 農業から始まるSDGs 「共生社会」を目指す滋賀県
滋賀県庁(農政課/食のブランド推進課/子ども・青少年局/企画調整課) |
| team7 |  | 木質廃棄物を有効活用しCO2の削減を
山室木材工業株式会社 |
| team8 |  | 昼TRY部の考える教育と自己理解
NPO法人 D.Live |
| team9 |  | 福祉の形 理想を追い求め模索
社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会 |
| team10 |  | 共生社会への第一歩 滋賀の「農福連携」とは
滋賀県庁(農政課/障害福祉課/企画調整課) |
| team11 |  | SDGsとビジネスをつなぐパイオニア ～しがハブの挑戦～
滋賀SDGs×イノベーションハブ |

SHIGA SDGs Studios

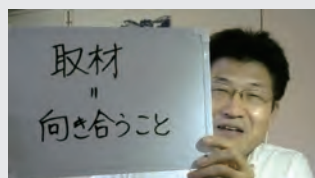
「SHIGA SDGs Studios」では、環びわ湖大学・地域コンソーシアムに加入する自治体を中心とした実践者、滋賀県を中心に様々な活動に取り組む企業やNPOの方に参加学生がインタビューを行い、SDGsの観点から記事を執筆。最終成果を冊子やメディア、Web、動画で発信します。大学や学部・学年の異なるチームメンバーとともに社会課題を知ることや取り組みを発信する楽しさを体験できるプログラムです。今年度は新型コロナウイルス感染症対策として、全プログラムをオンラインで行いました。

 社会課題を知って、取り組みを発信！



記事作成

SDGsレクチャーや取材・記事作成講座を通して、必要な知識や心構えを身につけ、世の中に発信する記事を作成します。記事の執筆にあたっては、朝日新聞社講師や事務局スタッフによる添削や執筆サポートを行いました。



SDGsレクチャー・取材記事作成講座の様子。レクチャーはすべてオンラインで行いました。



SDGsレクチャー
講師

学校法人立命館
立命館 SDGs 推進本部
イノベーション・オーガナイザー

上田 隼也 氏

立命館大学卒。インパクトラボ代表理事。学生時代からSDGsに実践的に取り組み、立命館大学で日本初の学生主体のSDGsイベント・Sustainable Weekを立ち上げる。現在は立命館 SDGs 推進本部でイノベーション・オーガナイザーを務めながら、教育現場でも実践に取り組む。



記事・取材
講座 講師

株式会社朝日新聞社
外園 周二 氏

1989年朝日新聞社入社。高知・京葉総局記者、東京・福岡・名古屋・大阪の各本社で編集記者や次長（デスク）、広報部次長、高知総局長、編集局教育ディレクターを経て、大阪本社代表室主査（教育総合本部）。立命館大学教養ゼミナール「SDGs 表現論」でも特別講師を担当。